

日本音楽集団第119回定期演奏会
海外からの作品特集～そのIII

企画・構成 三橋 貴風

パリオ・ホール

1991年7月11日(木)
午後7時開演

主催 日本音楽集団

プログラム

司会 石田 一志
通訳 長田 有子

一、ミッド・ナイト・レイン——二面の箏の為の

作曲 Elizabeth Falconer (U.S.A.)

[箏] I = 花房はるえ II = 木村玲子

二、粉ひき池の空に雲

作曲 James R. Cowdery (U.S.A.)

[笛] I = 藤崎重康 II = 竹井 誠
[尺 八] I = 三橋貴風 II = 米澤 浩 III = 素川欣也 IV = 水川寿也

三、演歌 II ——ソプラノと九人の奏者の為の<邦楽器版初演>

作曲 吉田 進 (フランス在住)

[歌] 田原順子
[笛] 竹井 誠 [笙・篠笛] 西原 貴子 [箏 築] 西原祐二
[尺 八] 水川寿也・添川浩史
[太棹三味線] 田中悠美子
[二十絃箏] I = 吉村七重 II = 山田明美 [十七絃] 大島菜穂子
[打楽器] 臼杵美智代
[指 揮] 高橋明邦

～ 休 憩 ～

四、金 雀 <委嘱・初演>

作曲 譚 盾 Tan Dun (中国)

[尺 八] I = 三橋貴風 II = 藤崎重康 [琵琶] 田原順子
[二十絃箏] 吉村七重 [十七絃] 大島菜穂子
[打楽器] 望月太喜之丞
[指 揮] 高橋明邦

五、悟 り ——薩摩琵琶・尺八・打楽器の為に

作曲 Faidros Kavallaris (ギリシャ)

[薩摩琵琶] 坂田美子 [尺 八] 竹井 誠 [打楽器] 望月太喜之丞

六、WIND MUSIC <委嘱・初演>

作曲 Jack Body (ニュージーランド)

[笛] 藤崎重康 [箏 築] 西原祐二 [笙] 西原 貴子
[尺 八] I = 三橋貴風 II = 添川浩史 [胡 弓] 坂井敏子
[指 揮] ジャック・ボディ

一、ミッド・ナイト・レイン

緑に恵まれた、雨の多いオレゴン州に育った私にとって、雨の音はとても親しみのあるものです。お箏は自然界の様々な音、特に水のあらゆる音や雰囲気をも「再現（まね）」出来るのは昔から知られています。こういった特徴を生かしてある夜遅くに屋根にあたる雨音を聞きながら、この曲に、明るい気まぐれなリズムと絃を叩く等の箏のテクニックを取り入れてみました。（作曲者）

エリザベス・ファルコナー： 箏を沢井一恵に師事。約10年間日本に滞在し、昨年帰国した後に地元の大学で日本文化の講義をしている。

二、粉ひき池の空に雲

アンサンブルができる尺八の本曲を作る事を目的として、伝統的な音と技術を基にして演奏者がお互いに作用（びっくりさせたり、喜ばせたり）しあえる場を作りました。演奏するたびに違った花が咲くように、新しい気持ちで実験を重ねて粉ひき池の景色を想像し続けて下さい。（作曲者）

この作品は、日本音楽集団第103回定期演奏会で委嘱初演されました。

ジェームズ・R. カウドゥリー： 作曲家として以外にも、アイルランドの笛、リコーダー、マンドリンなどの演奏家としても活躍し、現在、コネチカット州及びニューヨーク州で世界音楽を教えている。

三、演歌Ⅱ

演歌とは、日本語の持つ様々な音楽的要素（発音、抑揚・・・）を誇張することで、‘歌’を‘演’ずるものです。この作品は、ソプラノと九つの西洋楽器のために書かれていますが、三橋貴風・吉村七重両氏のアイディアで、今回、日本音楽集団の編成に翻案し、演奏されることになりました。拙作が、このように伝統楽器によって再演されるという発想が、僕にとって大きな啓示となりそうです。

“演歌・流離（さすらい）・未練・儚ない（はかない）・根性・生きてゆく”（作曲者）

吉田 進： 慶応大学を卒業後、パリの国立コンセルヴァトワールにて作曲を学び、以来フランス在住。ヨーロッパを中心に活躍している。

この作品は1980年4月にフランス国営放送局ホールにおいて矢崎彦太郎の指揮により初演された。

四、金雀

「金雀」は、私たちを取巻く目に見えない美であり、その意味がどんどん転換していってしまう‘夢’の輝くような印象を表現しています。この作品は、精神を集中し、聴衆に直面した指揮者と共に円弧に位置した演奏者が、楽器、声、静寂を用いて行う儀式に似ています。通常の音楽における休止としての休符は、ここでは豊かな演奏行為の価値として発展しています。私は指揮者を見る訓練で、音楽構造上の間を形創ることにより、音のない音量が存在するを見出しています。演奏行為における無音のダイナミクスというものの存在をここに表現してみたいと思っています。（作曲者）

譚盾： 中国を代表する作曲家の一人。中央音楽院で学んだ後、アメリカのコロンビア大学の奨学金を得て渡米。ドイツの国際作曲賞、バルトーク賞（アメリカ）、入野賞（日本）等、多くの賞を受賞。現在は1993年にエジンバラ・フェスティヴァルで初演されるオペラ「マルコ・ポーロ」を作曲中。

五、悟り

この作品の中で、私は日本で得た新しい体験、新しい感覚や知識をもとにした新しい表現方法を探求している。もちろん私自身、日本音楽の一般的な基礎知識、例えば、自由なリズム、音色の重要性、微小な音程変化、音楽の重層構造、自然と調和する思想等に深く関わらざるを得なかった。ここで用いられる楽器、琵琶、尺八と仏教儀式や家庭での祈りに用いられている打楽器（鳴らしもの）は、日本音楽のその宗教伝統に特徴的なものであると思う。ここでは、鳴らしものが作品の形式を決定づける上で重要な働きをしている。また禅定に入って問答を繰り返すかのように尺八と琵琶は全く自由に動く。そして鳴らしものと係わりあいながら、ほとんど予測不能な答えに到達、それを体験する。

（1991年4月15日、サントリー小ホールにおける初演時のプログラムより、作曲者）

フェドロス・カヴァラリス：ギリシャのキプロス島に生まれる。その後、同島で軍部のクーデターとトルコ軍の侵略が勃発。難民となった彼は、キプロスの民衆の痛ましい体験や希望を描写した詩に作品を書き続ける。近年東洋の音楽文化に関心を持つようになり、インド、中国、そして日本にも本年4月まで一年あまり滞在していた。

六、WIND MUSIC

この表題は二つの意味を持っています。音楽自体には風の変化に富んだ響きと性質が吹き込まれており、また私が選んだ楽器編成は主として管楽器であるということです。これらの個々の楽器の印象はあるのですが、私自身のそれらに対する不十分な知識によって作曲している現在、この作品は私にとりましては探査そのものであります。又、この作品は三つの連続した部分からなっています。

演奏者の方々が私の“研究成果”から音楽を創り出して下さる、その芸の力と忍耐とに感謝致します。そして本作品は、今回お招き頂きました日本音楽集団に謹んで献呈をさせていただきます。（作曲者）

ジャック・ボディー：現在ニュージーランドを代表する作曲家であり、1984年に現地で開催されたアジア・パシフィック・フェスティバルのオルガナイザーを務めた。中国、韓国等の音楽にも精通し、昨年のアジア・フェスティバル（東京及び仙台で開催された）では、中国南部の民族音楽を素材とした作品により注目された。最近では弦楽四重奏団「クロノス」にも作品を書いている。

御挨拶

本日はお忙しい中をご来場下さいまして誠に有難うございました。

このシリーズは1981年から始まり、5年間隔で行なわれ、今回が3回目となります。

昨今、海外を訪れました折に現地の作曲家達から必ずと言って良い程に尋ねられるのは、日本の伝統楽器の為に作品を書きたいのだが、楽器を理解するためのマニュアル（機能、構造、歴史等）は存在しないのか？と言うことです。現状では残念ながら手製の英文のものがあるだけなのですが、今回の作品の様に実際に書かれた曲自体が具体的な資料となり、将来海外の作曲者達が音楽の素材として邦楽器を普遍的な印象で捉らえる時の参考になるかもしれません。現在では、邦楽器の演奏を一方的に聴いて頂くような形ではなく、現場でのより実質的な交流が望まれているのではないのでしょうか。

また、今回のコンサートの為に新たな作品をお書き頂き自ら指揮をして下さいるジャック・ボディー氏、そしてやはり新作を下さった譚盾氏、改訂初演をさせて頂いた吉田進氏、他多くの方々に心から感謝を申し上げます。
（プロデューサー 三橋貴風）

日本音楽集団 〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1-302 TEL.03-3378-4741 FAX.03-3376-2033

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437